

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 第 号
------	-------

氏 名 朴 善嫻

論 文 題 目 二字漢字語のデータベースによる

動詞化と形容詞化の日韓対照研究

### 論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	玉岡 賀津雄
委 員	名古屋大学教授	鹿島 央
委 員	名古屋大学准教授	杉村 泰
委 員	山口県立大学教授	林 炫情
委 員	筑波大学准教授	李 在鎬

## 別紙 1 - 2 論文審査の結果の要旨

## [論文の意義]

韓国語の漢字語に付随する *-hada* は、日本語の動詞 *-suru* に類似しているため、双方の話者が転移をさせることが多く、その中で正の転移のみではなく、負の転移も引き起こしてしまう。そこで、日韓共通の漢字語で、使用頻度の高い 2,000 語を抽出し、これらの語に「*-hada/ -doeda/ -的*」および「*する/的*」が付随するかどうかを示したデータベースを作成し、Excel で誰でも使用できるようにした。また、日本語能力試験の配当級にある漢字語のデータベースを作成した。これらのデータベースによって、日韓両言語に現れる形態統語的な違いが明らかにされ、母語からの干渉が起こりやすい語彙の特徴を示した。このような日韓の違いを詳細に示した多角的なデータベースはこれまで作られておらず、画期的な漢字語のデータベースである。特に、日本語学習者に対する漢字語の統語的な困難点が明らかにされ、漢字語がデータベース化されたことは画期的である。今後、さらに広い分野への応用可能性と、語彙研究への貢献が期待される論文である。

## [論文の概要]

本論文は、日本語と韓国語に存在する2字漢字語に着目し、両言語における同形漢字語に付加される語尾を集計し、計量的検討を行ったものである。その際、日本語と韓国語の同形語だけではなく、一方の言語のみに存在している漢字語も検討に入れ、それらの漢字語に付加する語尾の情報もデータ化した。そして、両言語間の2字漢字語の形態的特徴が比較できるデータベースを作成した。

第1章では、日韓両言語は、語彙的に非常に類似しており、両方とも自国語の語種の中で漢字語が半数以上を占めていることを記述した。韓国語の場合は、使われている語彙の約7割は漢字に変換できる漢字語であるが、現在、韓国の日常生活で使用されている文字はハングルであるため、漢字を使うことはほとんどない。まず、韓国語の中で漢字語が使われている場面や、韓国での漢字語の使用を本研究の背景として紹介している。このような韓国語における漢字語の位相・漢字文化の背景・学校教育における漢字政策の状況を述べた。それにより、韓国語に内在している漢字語の使用現況が確認できた。両言語で多用されている2字漢字語の類似性や、漢字語に関わる語尾における形態的な類似性や相違性に着目し、本研究の成り立ちについて述べ、日韓両言語における2字漢字語のデータベースを作成することを目的とすることを述べた。

第2章では、韓国語の漢字語に関する先行研究を概観し、本論文の位置づけを行っている。韓国語における漢字語の起源を探り、その漢字語が韓国語の固有語に同化され使用し続けている語彙性特徴の検討を行った。また、語根として使われる2字漢字語に付加する語尾について先行研究を検討した。具体的に、漢字語に付加される語尾において、動詞性・形容詞性を有している2字漢字語に関する語根のメカニズムを分析した研究を含め、それに付加される接尾辞の *-hada* や *-doeda*、「*-的*」の拡張した使用について検討した。それにより、漢字語が韓国語の言語体系に同化され、固有語との融合により成立していることが確認でき、これで、日韓両言語の漢字語における比較対照の根拠に成り立ち、両言語の2字漢字語をデータベース化することに意義があるということを確認した。

第3章では、韓国語の2字漢字語に *-hada* を付加することで動詞あるいは形容詞になることに言及し、どのような語彙性アスペクト特性を持っている場合に動詞化あるいは形容詞化されるかを検討し

## 別紙 1 - 2 論文審査の結果の要旨

た。韓国語の高使用頻度の漢字語 2,000 語を抽出し、これらの語に *-hada* が付加されて動詞あるいは形容詞になるかどうかを、「開始」「継続」「終結」「状態」の4つのアスペクトおよび使用頻度で予測する二項ロジスティック回帰分析を行った。2字漢字語 2,000 語のうち動詞として *-hada* が付加されるのは 843 語で、その中でも「終結」のアスペクトの有無で 81.49%(687 語 / 843 語)が予測できた。「開始」と「継続」のアスペクトは、「終結」との重複が多かった。「状態」は他のアスペクトとの重複が少なく、「終結」に次ぐ 21.35%(180 語 / 843 語)の予測力を示した。形容詞として *-hada* が付加されるのは 86 語であった。「状態」のアスペクトの有無だけで形容詞としての *-hada* の付加が 90.69%(78 語 / 86 語) 予測できた。つまり、2字漢字語の *-hada* 付加による動詞化は「±終結」と「±状態」のアスペクトの特性で予測でき、形容詞化は「±状態」で大部分が予測できることが分かった。

第4章では、日本語と韓国語の共通した2字漢字語の形態統語的な類似性と相違性を計量的に検討した。2字漢字語の中でも、ある特定の語尾が付加されることにより、名詞が動詞化あるいは形容詞化する語で日韓ずれがある語があり、日韓両言語で動詞になる語でも、その漢字語が能動態か受動態かにより、日韓でずれが生じる語がある。また、形容詞の性質を持つ接尾辞「-的」の付加も調査対象に入れ、「-的」の出現傾向も検討した。その結果、調査対象語の 1,872 語のうち動詞は、日本語は 609 語(32.5%)で、韓国語は 631 語(33.7%)であった。一方、形容詞は、日本語は 169 語(9.0%)で、韓国語は 127 語(6.8%)であった。動詞と形容詞の両品詞を持っているのは、日本語は 26 語、韓国語は 11 語であった。また、動詞に関しては韓国語では受動態と能動態を分けて集計した。その結果、*-doeda* が付加可能なのは、631 語のうち 318 語(50.4%)であった。

第5章では、本論文で最終的な目的である「日韓2字漢字語データベース」について、漢字語のデータベースの作成の過程や結果を述べている。データベースは3つの資料に分けて作成し、さらに漢字語の情報別に細分化した。「資料 I」では、(1)「2,060 語の日本語辞書調査」:日本語能力の中級のレベルに相当する語彙のうち2字漢字語(2,060 語)の品詞情報が得られるようにしたもの、(2)「1,872 語の日韓同形2字漢字語」:日韓同形語の 1872 語に対して、日本語と韓国語の品詞の情報が比較できるように載せたもの、(3)「韓国語に無い漢字語 188 語」:韓国語には存在しない日本語独自の 188 語に対して品詞情報が参考できるように載せたもの、(4)「日韓同形語の品詞別割合」:日韓同形語で動詞や形容詞においてずれがある漢字語の項目が確認できるように載せたもの、(5)「日韓の形容詞性2字漢字語」:日韓同形語の 1,872 語の中で、日本語と韓国語の形容詞を比較できるようにしたもの、である。「資料 I」から、日本語能力が中級レベルまで上がるにつれ、全体的に日韓での同形語の語数は、急増することが示した。また、これらの同形語において、動詞は韓国語の方が多く形容詞は日本語の方が若干ではあるが多いことも示された。

一方、「-的」の付加においては、日本語より韓国語の方が多かった。特に、2級の語彙では日韓の差が他の項目より非常に大きかった。「資料 II」には、[シート1]「『旧試験』日本語2字漢字語 3,698 語」:日本語能力上級レベルに相当する語彙のうち、2字漢字語(3,698 語)を抽出し、その品詞情報と語尾の付加可否が得られるようにした。[シート2]「日韓同形2字漢字語 3,419 語」:3,698 語のうち、日韓同形語 3,419 語の日本語の品詞と韓国語の品詞を対応させて比較できるように並べた。[シート3]「韓国語に無い漢字語 279 語」:3,698 語のうち韓国語には存在しない漢字語を分け、その特徴や傾向が分かるようリスト化したものである。「資料 II」では、日本語学習において上級レベ

## 別紙 1 - 2 論文審査の結果の要旨

ルに相当する2字漢字語を対象とした。従って、日本語の語彙学習における基本的な2字漢字語の品詞性が確認できるようにした。さらに、韓国語母語話者にとっては学習言語と母語との関係が明確に比較できるようにした。「資料Ⅱ」の作成を通じて、中級レベル(2級)から上級レベル(1級)に上がるにつれ、2字漢字語の語数そのものは増えていない(2級:1,666語, 1級:1,638語)が、動詞として *-suru* が付加される語は増えていることが分かった(2級:534語/1,666語, 1級:691語/1,638語)。このように初級から中級では2字漢字語の語彙数が急増したことに比べ、中級から上級の間ではそのような変動はなかった。つまり、上級レベルでの2字漢字語の語彙性の特徴は2字漢字語そのものに内在している品詞性にあると考えられる。

最後に「資料Ⅲ」は韓国語の漢字語を中心に載せた。「資料Ⅲ」には、[シート1]「韓国語の高使用頻度 2,000語」:韓国語の使用頻度が高い 2,000語を抽出し、これらの語に「*-hada/-doeda/-的*」が付加するかどうかを載せた。[シート2]「韓国語母語話者判定と辞書記述」:韓国語の漢字語 2,000語に対し、品詞の判別を、辞書の記述と2名の母語話者の判定から確認できるようにした。[シート3]「韓日同形2字漢字語 1,920語」:2,000語のうち日本語にあるかどうかを調べた結果、1,920語が抽出された。この 1,920語に対し、韓国語の語尾の付加と日本語の語尾の付加を比較できるように双方を対応して載せた。[シート4]「日本語に無い漢字語 80語」:2,000語のうち、日本語には存在しない2字漢字語 80語を載せた。「資料Ⅲ」の作成を通して、韓国語の2字漢字語のうち、動詞として使われる語の割合が非常に高いことが分かった(902語/2,000語)。それに比べ、形容詞として使われる語は少なく(103語/2,000語)、「*-的*」を付加する語が非常に多いことが明らかになった(389語/2,000語)。以上、3つの資料の作成から、日韓同形語における2字漢字語の比較対照を通して類似点や相違点が明確になった。本研究では、日韓両言語ともに、最も基本的である2字漢字語を選別し、調査の対象とした。一方の言語では使用頻度の高い語でも、もう一方では漢字語は存在しているが実際の使用率は低い語があるなど、両言語で使用の実態が異なっているという問題点も明らかになった。

第6章は総括である。韓国は、表面的にはハングルを使用する環境であるが、漢字文化が浸透しており、漢字語の存在は、固有語と共に韓国語の語彙体系の中心である。そこで、日本語と韓国語の2字漢字語に着目し、両言語の類似点や相違点を比較対照研究の視点から明らかにし、日韓2字漢字語のデータベースを作成した。特に日本語と韓国語において使用頻度が高い2字漢字語を対象とし、韓国語の2字漢字語の語彙性アスペクトを検討することで、漢字語の品詞性による語尾の予測ができることが明確になり(3章)、両言語の2字漢字語の形態的要素を計量的に検討し、日韓間の比較対照の検討を行った(4章)。これにより、両言語における2字漢字語の品詞性による語尾のずれや、両言語内の品詞性の特徴を計量的手法で検討した。本研究で作成した日韓2字漢字語のデータベースが、両言語の教育現場における語彙学習に貢献できることを願っている。

## 別紙 1 - 2 論文審査の結果の要旨

### [論文の評価]

口述試験では、以上の論文について、審査員から以下のような質問およびコメントが出され、博士論文提出者である朴善嫻との質疑応答が行われた。

1. 韓国語において、*-hada* をつけて形容詞になるのか動詞になるのかを判定する基準は何であったかという質問が出された。それについては、辞書で調べたと回答されたが、基本的には語尾の活用によって品詞が区別できるのではないかという判定方法に対する提案があった。
2. 「健康」は、形容化する語であろうが、「健康だ」という表現では、命令形としても使われる。命令形でも使用が可能であるということを考えると、動詞と形容詞の区別が本当にできるのかという指摘があった。それに対して、部分的には命令形で使用可能な形容詞があるが、それらは例外として扱ったという回答がされた。
3. 「砂糖」であれば、韓国語は「飴」の意味であり、表記が同じであっても意味的に異なるものがある。このように日韓両言語で意味がずれる場合はどう扱うのかという質問があった。意味的な違いについては非常に悩んだところである。例えば、「我慢」であれば、韓国語では仏教用語としてのみ使用され、使用頻度は極めて低い。判断には辞書を基準としたが、意味的な違いは、使用頻度と共に、今後の課題としたい。
4. 論文内に、「漢語」と「漢字語」の2つの用語が使用されていることがある。これらを区別して表記しているのかという指摘があった。漢語は、日本語では和語との対照として区別して使用される。韓国語では、中国語由来の語として区別して使われる。一方、「漢字語」とした場合には、漢字で書かれた語そのものを表すことができるので、日本独自または韓国語独自の漢字語双方を示すことができるため、「漢字語」として統一するという回答であった。
5. 本博士論文は、データベースの構築を含んでおり、資料としての価値が高い。データとして公開することで多くの人が使用できるようになるので、将来性のある研究である。高く評価することができる。
6. コーパス研究では、使用頻度が一つに指標として考えられる。「内閣」であれば、5,300、「黒板」は300件しか出ない。それなら、「内閣」が重要語となる。しかし、日本語学習者では、「黒板」という語の方が重要ではないか。そうした使用頻度の違いはどのように扱うのかという質問が出た。学習者使用頻度というのはなかなか判断し難いので、今回は扱わなかったが、今後そうした指標を追加して公開することを考えるという回答であった。
7. 頻度を見てデータを作る際に、洩れた語彙をどうするのかという質問があった。データベース作成については、日本語能力試験の語彙配当級のデータを追加した。何度も集計をやり直したが、それ



## 別紙 1 - 2 論文審査の結果の要旨

でも洩れてしまった語彙もある。現場の資料とのすり合わせをすることが重要であろう。これは、今後の課題としたい。

8. なぜ本研究では、1級レベルの語を含まなかったのかという質問があった。本研究では、レベルを中級に合わせるために、基本語彙に限定したかったので、2級までとした。

9. 日本語能力試験の3級と2級の間には大きな壁がある。それが、本研究のデータでも示された。3級と4級は和語の比率が大きく、1級と2級では漢語が多くなる。そういうバイアスがあることも論文の記述に含むのが良いであろう。この点については、加筆したいという回答であった。

10. 博士論文全体として、前半と後半とで一貫しているとは言えないようだ。本研究は、綿密なデータベースを作ることが最終的な目的である。そのため、論理的主張というより、実用的な有用性を重視した研究であるという回答であった。

11. 3章で二項ロジスティック回帰を使っているが、それをアスペクトの多層性や、類型論など言語理論を以って展開できないかという質問があった。今回の予測情報からみて、言語現象の中でアスペクトにどのような言語的な階層性があるのかを議論するのも面白いであろう。

12. 1章と2章が重複している。韓国語の豆知識は必要ではないであろう。韓国語の漢字語の検討を書くのであれば、日本語の漢字語の検討も含むべきであろうという意見があった。それに対して、現在の韓国大学生は漢字とかけ離れているが、漢字が語彙の背景にあることを認識してもらい、韓国が漢字圏であることを強調するために含んだ。

13. 4つのアスペクトはどのようにして区別したのか。アスペクトの言語上のテストはどうしたのかという質問があった。「一以内」であれば、「食事後1時間以内の休憩」という場合には、「休憩」については「開始」と解釈される。日本語母語話者にこれをどう取るかを調査すると、「開始」とは考えないかも知れない。また、継続相の開始と瞬間的な開始の場合はどうするか。こうした判断はきわめて難しく、本研究では、200語のランダムサンプルを使って、韓国語母語話者の判断の信頼性を検討したという回答であった。

14. 韓国語と日本語でアスペクト判断のための「言語テスト」が異なるのはなぜか。「終結」の予測力が強いのは、言語テストの判断の違いではないか。「開始」が予想し難いのは、言語テストの内容の違いの影響があるのではないかという質問がされた。また、アスペクト判断基準の違いがアンバランスなのではないかという指摘があった。これに対して、判断のし易さが言語によって異なるので、違う「言語テスト」を使用したという回答であった。

15. 漢字語の背景が韓国語母語話者にあるというのが良く分かった。また、データベースの作成は

## 別紙 1 - 2 論文審査の結果の要旨

大変であったと思う。とても評価できるというコメントがあった。

16. 「語彙」という用語がよく出てくるが、その意味は何か。「語彙で類似している」とはどのような意味で使用しているのか。語彙は集合的な意味で使用したという回答であった。

17. 音韻的共通性とは何か。日韓の漢字語に音韻的共通性がある。これは音読みで、特によく似ている語が多いという意味で使用した。

### [論文審査委員会による合否判定]

以上のようにさまざまな指摘、改善点、今後の検討についての助言があったが、それぞれの点について適切な回答が得られた。全体として本論文は質量ともに博士課程後期の学位論文としての基準を十分に満たしていると審査委員会の全員一致で判断した。したがって、本論文を合格と判断した。